

中心部メモリアル拠点検討委員会報告（骨子案）

目 次

1 検討の前提

- (1) 東日本大震災の概要
- (2) 中心部震災メモリアル拠点の位置付け（本市の震災復興メモリアル事業全体における位置付け等）
- (3) 他の災害メモリアル施設等の状況
- (4) 本市内における震災伝承に関わる取組みの状況

2 東日本大震災が持つ意味：本拠点の検討にあたって

- (1) 東日本大震災がもたらした経験が持つ意味
- (2) 仙台において考える意味：都市の性格から

3 本拠点が担う「震災伝承」

- (1) 震災の経験と教訓を理解し、災害に対する「社会のあり方」を考える [テーマ]
- (2) 仙台の「まちづくりの歩み」の中で考える [文脈]
- (3) 想像と創造を通じて「知恵」を生み出し、継承し、発信する [手法]
- (4) 中心部という特性を活かす [場所性]

4 本拠点が持つ性格 — 「災害とともに生きる社会」の創造の拠点—

- (1) 目的
- (2) キーコンセプト：震災の経験に基づいた災害とともに生きる都市文化の創造と継承
- (3) 基本的役割
- (4) 拠点の性格

5 拠点の展開イメージ

- (1) 機能
- (2) 展開における工夫

6 今後の具体化に向けて

- (1) 立地の基本的要件
- (2) 今後の検討課題

1 検討の前提

○ 本拠点の位置付けを考える上で、震災の概要と、これまでの検討における位置付け等から整理する。

- (1) 東日本大震災の概要
- (2) 中心部震災メモリアル拠点の位置付け（本市の震災復興メモリアル事業全体における位置付け等）
- (3) 他の災害メモリアル施設等の状況
- (4) 本市内における震災伝承に関わる取組みの状況

2 東日本大震災が持つ意味：本拠点の検討にあたって

○ 「現場」とは異なる本拠点の検討にあたり、対象となる「東日本大震災」とは何だったのかについて、震災という経験全体が持つ意味合いと、それが仙台との関わりにおいて持つ意味を整理する。

(1) 東日本大震災がもたらした経験が持つ意味

- ① 多様な災害（広域性、複合性、原発など）／多様な経験（一人ひとりで異なる被災の様相、経験が持つ意味など）
- ② 社会のあり方を問うものであること（自助・共助・公助のあり方、エネルギーや情報の途絶等社会システムの脆弱性など世界史的・文明史的な課題をはらむこと）
- ③ 記憶や経験を伝えることの重要性和困難さという課題

(2) 仙台において考える意味：都市の性格から

- ① 繰り返してきた災害の歴史
- ② まちづくりを担う市民力と諸課題の克服
- ③ 東北の拠点、知的・経済的資源の集積という都市特性
- ④ 震災が契機となった発信（国連防災世界会議と「仙台防災枠組」、国内の災害への貢献など）

3 本拠点が担う「震災伝承」

○ 今回の震災とそれが仙台にとって持つ意味を踏まえて、本拠点が担う「伝承」の性質を整理する。

- (1) 震災の経験と教訓を理解し、災害に対する「社会のあり方」を考える [テーマ]
多様な経験を理解する／様々な教訓から学ぶ／社会のあり方を考える
- (2) 仙台の「まちづくりの歩み」の中で考える [文脈]
災害の経験や市民の知恵を歴史の中に位置付ける／知恵を受け継ぐ／新たな市民文化とする
- (3) 想像と創造を通じて「知恵」を生み出し、継承し、発信する [手法]
多様な経験・他の災害・他の時代から学ぶ／自分との繋がりを想像する／これからの知恵を創造する
- (4) 中心部という特性を活かす [場所性]
非現場性／拠点性／ショーケースとしての仙台の特性
→ 東日本大震災を中心にしつつ様々な災害への視野を持つ／東北の被災地へのハブ機能、様々な連携の核となり得る／都市のビジョンの発信やメッセージ性を担える
⇒ 現場性を持った伝承施設とは異なる独自の役割と志向性を持った「伝承」

4 本拠点が持つ性格 — 「災害とともに生きる社会」の創造の拠点—

○ このような「伝承」を進める場として、本拠点が持つべき基本的な構成を提案する。

(1) 目的

- ・ 東日本大震災の経験と教訓を継承することはもとより、時代や地域の違いを超え、時代にふさわしい形で、将来の災害を乗り越える知恵を新たに創造し、伝えていく。
- ・ 仙台の持つ歴史や市民に受け継がれてきた「市民力」や「知恵」などを、未来の市民に伝えるべき文化として、継承、発展させる。

(2) キーコンセプト：震災の経験に基づいた災害とともに生きる都市文化の創造と継承

災害とともに生きる社会のあり方、及びそうした文化を持つ都市・仙台を継承・創造する

- ・ 本市や市民の過去からの経験と歴史的に培われてきた市民性そのものを一つの文化と捉え、
- ・ 震災の経験と復興からの教訓をもとに、更に時代や地域の違いを超えて、人と災害の繋がりを想像することなどを通じて、「災害とともに生きる社会のあり方：災害文化」を不断に創造し、継承し、発信する。

(キーワード①「災害文化」)

災害の経験を契機に、災害を完全に避けることはできないことを認識した上で、災害に遭遇した際に社会システムの破綻を最小限度に食い止め、人々の生存可能性を高める文化。

(3) 基本的役割

- ① 震災の記憶の身体化を通じた「超長期にわたる記憶の保持」
- ② 協働による「知恵の創造と社会への実装」
- ③ 経験と教訓、知恵の「内外への発信とそれによる貢献」

(キーワード②「身体化」)

日常的に繰り返し五感を作用させることなどを通じて、それと意識せずに震災の記憶を個人（ひいては社会）の認識として定着させていくこと。また、そのことを通じて、いざというときに、記憶を想起し、判断や行動をとれる状態にすること。

(4) 拠点の性格

- ① 「活動の中から創造的なものが生み出される場」としての性格
- ② 「多様な人が集い、交流する場」としての性格
- ③ 震災や伝承に関わる様々な場や施設との「ネットワークの拠点」としての性格
- ④ ①～③を補完する一定の「ミュージアム・アーカイブ機能」としての性格
- ⑤ 時間が経っても震災の伝承の拠点として想起される「拠り所」「シンボル」としての性格
- ⑥ 震災の経験を基底とする、「仙台の街・市民のアイデンティティ」としての象徴的な性格

5 拠点の展開イメージ

○ 拠点の基本的な構成イメージを基に、具体的な展開イメージを描く。

(1) 機能

■ 「日常での記憶の継承」のための機能

日常の中で、震災の記憶に繰り返し触れ、過去と現在、未来を想像する仕組みとするために、市民が日常的に行き交う場所に、震災の記憶の拠り所となるシンボルと記憶の集積の場を設ける。

- ① 広場機能（人が日常的に集い、交流する／追悼等の場となる）
- ② シンボル（震災の経験を想起する・震災全体を表象する／モニュメント／音なども）
- ③ アーカイブ（震災の記憶を蓄積する／市民の共有財産とする／記憶を託す拠り所となる／新たな知恵の創造を支える／各地のアーカイブと連携する）
- ④ 展示（震災の記憶を想起する／都市の歴史との関わりを意識する／他被災地へのインデックスとなる）

■ 「新たな知恵の創造と実装」のための機能

震災の経験と知見をはじめとする様々な災害等への想像力などを通じて、これからの（災害とともに生きる）社会やまちづくりに生かすことのできる「知恵」生み出すとともに、教育や文化・経済的な視点を持って社会実装を目指す。

- ① 創造と交流の場（議論する場／ワーキングスペースや創作スペース などを有する）
- ② 発信と展開（発信する／地域に出向く などの活動を担う）
- ③ コーディネート機能（他の地域に繋げる／実践者や研究者に繋げる などの役割を担う）

(2) 展開における工夫

本拠点自体を将来にわたって持続的なものにするために、関連する都市機能との連携などを工夫する。

- ① テーマや役割が重なる施設や機能との連携（「市民活動」「都市アイデンティティ」「広場性」等の視点から）
- ② 誘客機能などの効果的な配置や連携（多様な人々が日常的に訪れるようにする視点から）
- ③ 運営の担い手の確保と育成（専門的人材の継続的な確保の視点から）

6 今後の具体化に向けて

(1) 立地の基本的要件

- ① 都市のアイデンティティを象徴的に示す場であること
「災害文化」を目指す仙台市の決意や覚悟を示す／街の歴史を振り返り、また未来を展望できる
- ② 多くの人が行き交う・交流できる場であること
市民の日常の中に溶け込む／世代を超えた継承や新たな人々の継続的な入り込みを得る
- ③ 他との繋がりを作れる場所であること
沿岸部への誘導等のインデックス性を有する／震災関係の他地域の施設と移動等を容易にする

(想定されるエリア)

中心部のうち、旧城下町エリア（歴史性や市民性の文脈、それらを含めたシンボル要素、連携拠点性、他施設との連携可能性等から。また、現場性の強い東部沿岸地域との差別化の視点も）

(2) 今後の検討課題

- ① 機能や具体的な活動に関する詳細検討
- ② 他の施設や機能との連携可能性の検討
- ③ 上記を受けた、立地、形態、規模に関する詳細検討
- ④ 運営及び人材のあり方
- ⑤ 検討を進める手法（本提言の趣旨を実現するための効果的な手法等）